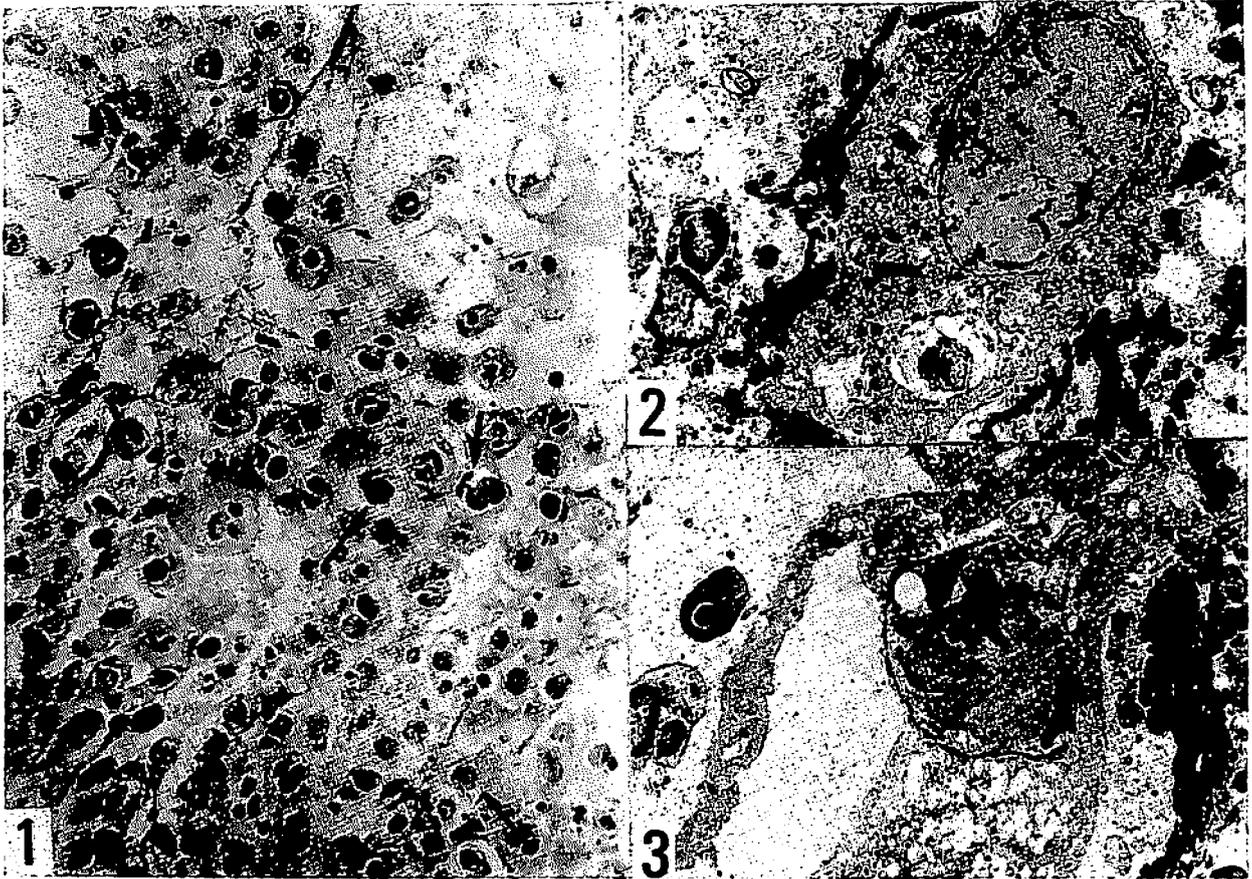


ワクチニアウイルス人工感染豚発痘病巣における核内封入体

北里研究所付属家畜衛生研究所出題 第16回獣医病理学研修会標本 No.233



生後5ヵ月のSPF豚下腹部皮膚に切創を作り、ワクチニアウイルス池田株を接種した。提出標本は接種後3日の接種部材料である。採材時には発痘はすでに形成されており、切創部に若干の滲出液と痂皮がみられた。

組織像としては先人の記載したワクチニアウイルス感染豚の発痘病巣に一致する諸病変に加えて、きわめて特徴的な所見としてウイルス接種部の表皮細胞の核内封入体(NI)形成を指摘しえた(写真1)。NI保有細胞は密にあり、それらは変性重度で、核周囲細胞質の大空隙形成ならびに細胞質の荒廃が目立った。NIは形態的に3型に分類された。I型は好中性～や、好酸性の均質なNIで、最も頻繁に認められたもので、NIで充満した核は腫大し、核膜との間に明庭は目立たなかった。II型は好酸性で線維状構造を指摘しうるNIで、核膜との間に明庭を認めた。III型は好酸性の均質な比較的小型のNIで、数は少なかった。周囲核形質との境は明瞭で、1細胞核あたり1～3ヶ認められた。電顕的に、NIのそれぞれの型は微細線維(写真2)、細線維(写真3)、および

円筒状構造物より構成されており、NI内にウイルス粒子あるいはそれと関連する構造物はみられなかった。

一方NIと同一領域に種々の形態を示す原形質封入体(CI)が多数認められた。すなわち好酸性顆粒状を呈し、比較的小型ではあるが円味を帯び充実したCI(型I)、淡明～両色反応性顆粒状を呈し、核膜に沿って細長いCI(型II)、ならびに好塩基性均質状の小球状をなすCI(型III)が指摘された。NI保有細胞ではCIは認められないか、あるいはII型のCIが観察された。電顕的に、いずれの型のCIもウイルス粒子形成は低く、NI保有細胞でみられたII型のCIではウイルス粒子は著しく低形成である上に、形成された粒子の多くはウイロプラズマを欠いた中空の粒子であった。

以上ワクチニアウイルス感染による豚皮膚病巣に関し、著しく特徴的なNIに重点を置き記載した。NIは恐らくは感染にともなう二義的变化と推察しうるが意義あるいは成因に関する解明は今後に待つところが多い。